博士学位論文審査要旨

２０１２年１２月２２日

論 文 題 目：　ヴァルター・ベンヤミンの仮象概念についての美学的考察
学位申請者：　村上　真樹
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　岡林　洋
　副　査：　文学研究科　准教授　越前　俊也
　副　査：　西南学院大学　准教授　森田　團

要　　旨：

本論文はヴァルター・ベンヤミンの美学を、初期の論攷「ゲーテの『親和力』」（1921/22 年）における「仮象」の概念の検討を通して浮かび上がらせようとするものである。ベンヤミンの美学が問題となる場合には、後期の著作における「アウラ」の概念が取り上げられることが多い。しかし本論文は前期ベンヤミンにおける美と仮象の問題に注目することによって、ベンヤミンの美に関する思考に一貫して見られる基本構造を提示するものである。

第一章はゲーテの小説『親和力』に対して行われたベンヤミンの解釈の概観である。ベンヤミンはこの小説に登場する三人の人物「オッティーリエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」に注目し、それぞれを「消え行く仮象、勝ち誇る仮象、表現をもたぬもの」という語で言い換えている。「消え行く仮象」とは、観念論美学において論じられてきた「美しい仮象」の概念を指すものである。第二章では、それをシラー、ゾルガー、ヘーゲルの美の概念と比較することによって、ベンヤミンがそれに対して批判的な立場をとっていたことを明らかにしている。ここにおいてベンヤミンは、美しい仮象を真理を覆うヴェールとしてではなく、目立たぬもの覆いととらえることによって、美しい仮象の価値の切り下げを図っているのである。それに対して「勝ち誇る仮象」とは、その背後に何も隠れていない仮象、純粋な見せかけとしての仮象である。第三章ではそれをニーチェの仮象概念と比較することによって、ベンヤミンがニーチェの立場に対しても批判的であったことを明らかにしている。ベンヤミンの言う「表現をもたぬもの」とは、美の乗り越え、仮象の乗り越えとしての「崇高」の契機である。第四章ではそれをカントの崇高概念と比較し、その差異を導き出している。ベンヤミンにとっての崇高とは、一瞬の中断によって仮象に裂け目を入れることとしてとらえられている。本論文は、これらの分析によってベンヤミンを論じるに当たって、ドイツ観念論に関して正確な理解力を持っていることを示している。

次に以上のような前期ベンヤミンの美学を本論文が後期の論考との関連の中において独創的な結論へと導くことになる。これは各章の論述から浮かび上がってくることになるのだが、「消え行く仮象、勝ち誇る仮象、表現をもたぬもの」という三つの区分は、後期における「アウラ、アレゴリー、革命」の概念へと引き継がれている。美しい仮象と同様、ベンヤミンはアウラを近代においては消え行くものとして扱っており、一方で芸術はアレゴリーに基づくものとなる。そして仮象の中断としてとらえられた「表現をもたぬもの」とは、歴史の進歩という仮象、あるいは資本主義の生み出す夢に対する中断の契機としての革命の概念へとつながっていく。本論文はこのようなベンヤミンの美学の基本構造を、1920 年から 40 年にかけてのドイツの社会状況と関連させてとらえている。前期ベンヤミンの「親和力論」は、1918 年に起こったドイツ革命の挫折を反映したものである。また 1933 年のナチス政権成立の年に書かれた断章において、ベンヤ

ミンはヒトラーとチャップリンの比較を行い、チャップリンのアレゴリー的な身振りがヒトラーの虚妄を暴きだす機能を担っていることを指摘している。それはファシズムによるアウラの捏造を告発するという機能である。そして死の直前、亡命中に書かれた「歴史の概念について」(1940年）において、ベンヤミンは再び革命による救済を正面から取り上げ、そこに最期の希望を託すのである。

以上、本論文によって、ドイツ観念論が美の仮象性に関して未解決のままで残しておいた問題に、ベンヤミン前期の美学思想がそれを批判的に継承しながらある一定の回答を与えたことが明らかになっており、この研究領域に新たな視点が構築されており、高く評価できる。さらにこの前期ベンヤミンとは一見無関係と受け取られてきた問題にまで同一テーマを追跡する点はきわめて独創的であり、今後のさらなる展開も期待できる。また本論文は美学会の学会誌である雑誌『美学』に掲載された査読付き論文をはじめとし、学術誌に掲載された研究の成果にもとづくものである。よって、本論文は、博士（芸術学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１２年１２月２２日

論 文 題 目：　ヴァルター・ベンヤミンの仮象概念についての美学的考察
学位申請者：　村上　真樹
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　岡林　洋
　副　査：　文学研究科　准教授　越前　俊也
　副　査：　西南学院大学　准教授　森田　團

要　　旨：

上記審査員は、村上真樹氏に対する総合試験を徳照館美学芸術学資料室において、2012 年 12 月 22 日午後 2 時から約 2 時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して適切に応答し、論文の独創的意義と主題に関する深い理解力を示すとともに、主題の背景となる美学史的な理解についても広範な専門知識を有していることも明らかにした。

また、語学試験（ドイツ語、英語）においても学位申請者が研究上要求される読解能力と運用能力を十分に持つことが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　ヴァルター・ベンヤミンの仮象概念についての美学的考察
氏　　名：　村上　真樹

要　　旨：

本論は、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）の「仮象（Schein）」の概念の検討を通して、彼の美学を浮かび上がらせる試みである。

ベンヤミンが残した幅広い領域にわたる多くの重要な指摘は、これまでもさまざまなかたちで引用され、解釈されてきた。アドルノやホルクハイマーによるフランクフルト学派的な受容をはじめとして、ユダヤ教神学、芸術批評論、カルチュラル・スタディーズ、メディア理論、ポストモダン理論、ポスト構造主義など、そのテクストの影響は多方面におよんでいる。もっとも、ベンヤミン受容を美学の領域に限定した場合、そこには今や主流となりつつある一定の方向性が見出せるように思われる。それはベンヤミンが「美学（Ästhetik）」を「知覚の理論（Lehre von der Wahrnehmung）」として規定していることを出発点とするものであり、そこでは近代における知覚の変容が考察の対象となっている。このような研究は、1980 年代後半から、ドイツ語圏と英語圏でほぼ時を同じくしてさかんに行われるようになった。前者を代表するのはノルベルト・ボルツの研究であり、そこにおいてベンヤミンは、美や芸術を研究対象とする従来の美学を越え出てゆくメディア理論家として位置づけられている。後者はスーザン・バック＝モースやミリアム・ハンセンの論考を嚆矢とするものであり、ここでもまた、19 世紀から 20 世紀にかけてのメディアや都市環境の変化が人間の知覚に与えた影響が問題となっている。

本論はこのような潮流に対して異を唱えるものではない。しかしながら、それらのベンヤミン研究の多くが、写真や映画、あるいは近代都市における体験を主な考察の対象とした後期の著作を取り扱うものであり、それに比して前期ベンヤミンの美学、文字通り「美（Schönheit）」を考察の対象とするその美学的論考がほとんど取り上げられていないことについては、これを問題視するものである。前期ベンヤミンの美学を扱った研究は、ヴィンフリート・メニングハウスやルドルフ・シュペートといったドイツ語圏の一部の研究者によるものにとどまっており、ベンヤミン研究の文脈においても、また美学研究の文脈においても、いまだ十分な検討が成されているとは言いがたい。このことは、ベンヤミンの美学思想が独立した体系として構築されたものではなく、あくまで作品に対する批評というかたちを取って展開されていることにも由来するものだろう。しかしベンヤミンの美についての思索は、カント、シラー、ヘーゲル、ニーチェといった美学の言説を十分に踏まえたものであるし、後のアドルノの美の理論に与えた影響も決して少なくない。本論は、ベンヤミンの美の概念を他の美学的言説と比較することによって、ベンヤミンの美学がどのように特徴づけられるのかを考察するものである。

そのために本論が注目するのが「仮象」の概念である。「見かけ」、「見せかけ」、「輝き」を意味し、両義的な価値を持つ「仮象」の語は、18 世紀から 19 世紀にかけてのドイツ哲学においてはさかんに論じられており、特に美しい仮象の問題は、近代の美学における重要な論点のひとつであった。ベンヤミンがこの「仮象」について中心的に論じているのは、前期の論考「ゲーテの親和力（Goethes Wahlverwandtschaften）」（1921 / 22 年）においてである。そこで彼は、ゲーテの小説『親和力』（1809 年）の読解を通して、美と仮象の問題についての考察を行っている。ベンヤミンは美を「神話的なもの（das Mythische）」としてある程度否定的に扱い、その乗り越えの中に救済の可能性を見出す。さらにまた、美を構成するものとしての「美しい仮象（der schöne Schein）」についての批判を行い、その再検討・再定義を試みるのである。その際に彼は、

仮象を体系的に論じるのではなく、それを作中の登場人物「オッティーリエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」の属性に重ね合わせてとらえている。もの静かでひかえめなオッティーリエは『親和力』のヒロインであり、ベンヤミンは彼女の美を「消え行く仮象（der verlöschende Schein）」として扱っている。一方、オッティーリエのいとこに当たり、若く溌剌とした魅力をこれ見よがしにふりまくルツィアーネは、「勝ち誇る仮象（der triumphierende Schein）」としてとらえられる。そしてベンヤミンは、それらの仮象の乗り越えをノヴェレの娘の決死の跳躍の中に見出し、それを「表現をもたぬもの（das Ausdruckslose）」と名づけている。

ここに示された三つの区分は、ベンヤミンの仮象概念の基盤を形成するものとしてとらえることができる。それは『親和力』という一作品の解釈であるにとどまらず、ベンヤミンの美の概念を浮き彫りにするものとなっているのである。「オッティーリエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」という三人の登場人物は、ベンヤミンにとって、美しい仮象に対するそれぞれに異なった立場を代表するものとして位置づけられている。したがって、ベンヤミンの美学思想を明らかにするためには、ゲーテの小説『親和力』に描き出された人物描写を仔細に検討することが有効となる。本論はこの小説のストーリーを下敷きにベンヤミンの仮象概念を見ていくことによって、まずはその内在的特徴を拾い上げていく。彼女たちについて述べられた指摘をもとに彼の仮象概念を導き出し、その上でそれを他の美学史上の言説と比較検討するならば、ベンヤミンの美と仮象のとらえ方をかなりの程度まで明らかにすることができるだろう。

本論は以下の順序で考察を進める。

第一章では、ベンヤミンの『親和力』解釈を、美と仮象の問題に焦点を絞って概観することによって、彼がそれらを否定的にとらえることの根拠を探る。ベンヤミンにとっての美とは、人間の生のあり方を規定する「神話的なもの」の宥和的形式としてとらえられるものであり、それは幻惑と同時に暴力の契機をもはらんでいるのである。また『親和力』論成立の背景を考察することを通して、彼のゲーテ解釈がゲオルゲ派による唯美主義的言説に対する批判を意図したものであったことを示す。

第二章では、ベンヤミンによって区別された二つの仮象の形式（「消え行く仮象」と「勝ち誇る仮象」）の差異を、『親和力』の登場人物オッティーリエとルツィアーネについてのゲーテの記述を手がかりとして導き出す。その上で、ここではオッティーリエに体現された「消え行く仮象」を、シラーの美の概念、およびゾルガーやヘーゲルの観念論的な美の概念と比較することによって、ベンヤミンが彼らの美学を否定的にとらえていたことを明らかにする。それはまた、後期の「アウラの凋落」の問題にまでつづくベンヤミンの基本姿勢となるのである。彼の意図したこととは、美と道徳との関係性、あるいは美と真理との関係性を断つことによって、美しい仮象の持つ力を抑制することであった。

第三章では、ルツィアーネの体現する「勝ち誇る仮象」について考察する。ここではそれをニーチェの仮象概念と比較することによって、ベンヤミンがそれについても否定的な態度を取っていることを示す。ニーチェにとっての仮象とは、真理から逃れるための純粋な見せかけとしてとらえることができる。ここではベンヤミンがそのような仮象を、仮象としてではなく、アレゴリーとしてとらえ直すことで、それを認識の道具へと変えようとしていたことを明らかにする。『親和力』論における二つの仮象の対立、オッティーリエとルツィアーネの対立は、アウラとアレゴリーという後期思想における対立概念の起源としてとらえうるものなのである。

第四章では、ノヴェレの娘に見られる仮象の乗り越えの契機としての「表現をもたぬもの」についての考察を行う。ここではまず、「崇高なるもの（das Erhabene）」としてとらえられた「表現をもたぬもの」をカントの崇高概念と比較することによって、ベンヤミンの崇高概念の特殊性を明らかにする。ベンヤミンにとっての崇高とは、人間的なものである美しい仮象の中断としての神的な契機であり、そこにおいてこそ道徳や真理もまた見出されるのである。それは崇高を美的カテゴリーのひとつとしてとらえるカントの立場とは根本的に異なっている。さらに本章では

この崇高の契機を、「例外状態」、「奇跡」、「批評」といった問題との関連の中でとらえ直し、最終的にはそれが「歴史哲学テーゼ」（1940年）における「革命」の概念にまでつながってゆくものであることを示す。

以上のことから導かれるのは、「オッティーリエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」の中に見出された「消え行く仮象、勝ち誇る仮象、表現をもたぬもの」という概念区分が、「アウラ」や「アレゴリー」といった後期の問題系へとつながってゆくものであるということである。写真や映画について論じた後期の著作においても、その根本には見かけのイメージとしての仮象の問題が横たわっているのであり、そのことから本論は、ベンヤミンの美学とは仮象の美学として位置づけられるものであると結論づける。ベンヤミンの美学における一貫した姿勢とは、仮象の呪縛を乗り越えようとすることであった。そして彼はそのための三つの方法を提示している。それはすなわち、(1) 美を真理や道徳から切り離すことによる仮象の価値の引き下げ、(2) アレゴリーによる仮象の脱魔術化、(3)「表現をもたぬもの」による仮象の中断である。ベンヤミンにとっての仮象の乗り越えとは、『親和力』論で注目された三人の娘に託されているのである。